

令和 8 年 度
宮崎国際大学 教育学部
一般推薦 I 期

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

教育学部 小論文

次の文章は、社会学者でオックスフォード大学の教授である 荻谷 剛彦^{かりや たけひこ}さんが、日本の学校が行う教育の範囲（＝教師の仕事）の広がりについて述べたものです。荻谷さんの意見を要約しなさい。また、日本で教師の仕事が増えていった理由とその対応策について、あなたはどのように考えるか、要約と合わせて600字以内で述べなさい。

学校は、子どもが大人になるまでに必要な知識を、それぞれの家庭にかかわって専門的に教える場として発展してきました。少数の大人が教師という専門家として、たくさん子どもたちを教える。と同時に、子どもたちがたくさん集まることから、人との協力のしかたやつきあい方といった、勉強以外のことを教えるのも学校の役目だということになりました。大人になる、つまり社会の一員になるためには、学校で教える知識だけではなく、社会生活に必要な習慣やルール、さらには学校の科目でいえば「道徳」に関する、人間や人生や世界についての基本的な考え方（人間観・人生観・世界観）も学校で教えたほうがよい、と考えられるようになったのです。

ところが、一方でこれらを教える場所は、学校だけにかぎりません。家庭も重要な場所です。地域の他の大人たちがかかわることもあるでしょう。さらには、教会や寺院が大きな影響力をもつ場合もあります。つまり、勉強以外の「大人になる」までに必要なことがらをどこで教えるかについては、社会全体の中で、さまざまな場所がかかわっていて、その間の役割分担もいろいろありうるということです。どんなところが、どんな責任を負うのか。その線の引き方によって、学校が行う教育の範囲（＝教師の仕事）も、変わってくるのです。

日本の学校の場合、とくにこの面で学校に期待されるところが大きいようです。日本の学校では、いろいろな活動が「よい大人になる」ための教育活動と見なされ、教育の範囲に入り込んでいくことが多いのです。

例をあげましょう。たとえば、給食。学校で給食を食べるだけなら、別に「よい大人になる」ための活動とは見なされません。ところが、どんなふうに食べるかということがかかわってくると、給食も立派な教育の一環となります。生徒たちが順番に給食係になって、みんな協力しあって昼食を食べる、食べ残しはいけないといわれる、など、たんにおなかをいっぱいにする以上に、給食には「よい大人になる」ための意味が与えられます。

学校のそうじもそうでしょう。アメリカの学校などでは生徒が自分で学校のそうじをするわけではありません。学校には、そうじをする人が雇われていて、その人の仕事になっているのです。それに対して日本では、自分たちで使う教室などを生徒自身がきれいにすることにも、「よい大人になる」ための活動としての意味が付け加えられます。

このように、学校での生活のいろいろな面が教育という仕事と関係づけられる。その結果、先生が責任を負わなければならない範囲も広がっていくのです。「これも、あれも教育のた

め」となることで、先生の仕事はどんどん増えていくのです。

これとは、ちょうど反対の例に見えるのが、アメリカの学校です。アメリカの学校では、先生は授業を教えることに専念しています。生徒の相談にのるのは、スクールカウンセラーという専門家で、どの学校にも必ずいます。生徒の問題行動は、こういう専門家がしっかり指導することになっていて、先生の仕事から外されているのです。クラブの指導も、専門のコーチや指導者がついたりします。それに、アメリカの学校では、放課後や休み中の教育は家族の責任という考え方がしっかりしていて、先生たちは校外補導などの仕事もしません。しかも、給料が支払われるのも、学校がある九月から六月まで。長い夏休みは給料も出ません。夏休みにクラブの指導をしたりすることもないのです。

それに対して、日本の先生たちは、じつにいろいろな仕事を、一年中にわたってやっています。土日だって、夏休みだって、クラブの顧問をしていたら学校に出ていきます。校外での事件や問題行動にも、学校の責任が問われることが少なくありません。いろいろな専門家が学校にいない分、先生たちが何でも引き受けているのです。

このように学校が行う教育の範囲が広がっていった理由は、どこにあるのでしょうか。先生にたくさんの仕事を期待するようになったのは、なぜでしょうか。あなたも考えてみてください。

(荏谷剛彦『学校って何だろう』による・一部省略がある)

令和 8 年 度
宮崎国際大学 教育学部
一般推薦Ⅱ期

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

教育学部 小論文

次の文章は、小学校教諭の経験があり、子育てや学校教育の問題に取り組む^{ふくだ はるか} 福田 遼さんが、令和になってからの子どもの不登校の特徴について述べたものです。福田さんの意見を250字程度で要約しなさい。また、あなたが先生になったとき、不登校の子どもたちにどのように向き合いたいと考えますか。要約と合わせて600字以内で述べなさい。

不登校の現状について、特筆しておきたいことがあります。それは、令和になって、不登校の増え方が変わっていることです。令和に入ってからグラフの傾きの大きさは、過去のどの時期と比べてもケタ外れです。

長年不登校問題に取り組まれている新潟大学の神村栄一教授は、極端な増加をみせるこの現象を、「令和型不登校」と名付け、著書で考察されています。神村教授が令和型不登校の特徴のひとつとして挙げているのが、「決定的な困難につながる要因がないこと」。家庭の中にも、学校の中にも、強いストレスや嫌なことがあったとは言えないし、まったくなかったとも言えない。本人の口からも原因らしきものは出てこない。そんな事例が増えているというのです。

ふつう、子どもが「学校に行きたくない」と訴えてきたら、なにか原因があるはずだ、と考えますよね。だから多くの親御さんは「なんで行きたくないの?」「なにか嫌なことがあった?」と尋ねる。あるいは、「もしいじめられているのなら、解決してあげたい」と考える人も多いでしょう。でも、神村教授の指摘の通り、実は今、「不登校になるのに別に理由はなかった」という子が増えているんです。たくさんの不登校児童生徒と接している僕の感覚としても「なんとなく行きたくなくなった」という子は本当に多いです。

感覚レベルの話だけではなく、データも紹介しておきましょう。たとえば、文部科学省の調査では、小・中学校の不登校の主な要因のうち、もっとも多い51.8%が「無気力・不安」でした。また、^{※注}認定 NPO 法人カタリバの調査によると、学校に行きたくない理由として、「自分でもよくわからない」「学校に行く意味がわからない」といった声も多く挙がっていました。

そんな子どもたちの声を受けて、「ただの甘えだろう」「怠けているだけなんじゃないか」といった意見が出ることもあります。けれど、みなさんには決して甘えや怠けではないことを知ってほしいと思います。その証拠に「親御さんが無理やり引っ張るようにして学校に連れて行こうとしたら、お子さんの体が震えて動かなくなった」といった例をたくさん知っています。つまり、言葉にはできないけれど、その子の中には、体が動かなくなるほどのつらさが本当に「ある」のです。僕は、「自分でもよくわからない」の言葉は、子どもたちの素直な訴えだと思っています。

加えて、神村教授は、「学校を休むってアリなんだ」と気づいた子が増えた、とも指摘されています。今は、SNS などを通して、「学校に行かなくても大丈夫だよ!」と発信する人

もたくさんいますよね。「不登校が増えている」という情報が子どもたちの耳に入こともあるでしょう。また、コロナ禍で長期間の休校を経験した子どもたちも多いです。あるいは、きょうだいやクラスの友だちなど、不登校の子が身近にいる子もたくさんいます。

つまり、今の子どもたちにとって、「学校を休む」ことはすごく身近で手を伸ばしやすい選択肢になっているんです。自分の手札に「休む」のカードを持っている状態。その状態で、学校でちょっと嫌なことがあったり、なんとなく気持ちが沈んでしまったとき、パッと「休む」というカードを切ってしまうのは、無理もないことに思えます。子どもたちの中では「我慢してでも学校に行くべきだ」というマインドが薄れてきているのかもしれない。

不登校を選ぶ子が増えて、周りの子どもたちにとっても不登校が身近な存在になった。原因がはっきりしないから、対策を打つのも難しい。じわじわと学校を休むことへのハードルが下がり、学校やクラスの中で不登校が連鎖していく……。令和という時代の価値観が定着してきた今、そんな「不登校が増える」サイクルができてしまっているのです。

そう考えると、これまでのように「なにか原因があるんだろう」「原因を解決したらまた学校に行けるだろう」と単純に考えるのは、望ましくありません。子どもたちのリアルな声に耳を傾け、新しい視点で、不登校の子どもたちに向き合わなくてはならないのです。

(福田遼『不登校をチャンスに変える一生モノの自信の育て方』による・一部省略がある)

※注 認定 NPO 法人カタリバ … 子どもたちへの教育支援を目的に2001年に設立され、東京都が認定した NPO 法人。

令和 8 年 度
宮崎国際大学 教育学部
一般推薦Ⅲ期

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

次の文章は、哲学・教育学を専門とする苦野一徳^{とまのいっとく}さんが、勉強することの意味や学校の使命について述べたものです。苦野さんの意見を250字程度で要約しなさい。また、苦野さんの意見を踏まえた上で、あなたが先生になったとき、子どもから「なぜ勉強しなきゃいけないの?」「なぜ学校に行かなきゃいけないの?」と尋ねられたら、あなたはどのように答えますか。要約と合わせて600字以内で述べなさい。

勉強する意味に絶対の正解なんてない。でも、それでもなお私たちは、おそらくほとんど誰にも共通するといっていい、最も根本的な勉強する意味を見いだせる。

誰にも共通する、勉強の意味。それは〈自由〉になるためです。勉強するのは根本的には〈自由〉になるためなのです。

ここでいう〈自由〉というのは、「生きたいように生きられる」ということです。できるだけ納得して、さらにできるなら満足して、生きたいように生きられているという実感のこと。これが〈自由〉という言葉の意味です。

「生きたいように生きたい」と思わない人がいるのでしょうか?好きな音楽をやって暮らしたい、好きな人と一緒に暮らしたい、遊んで暮らしたい、有名になりたい、できるだけ静かに暮らしたい……。この「こう生きたい」ように生きたい、と思うことを、〈自由〉の実感を欲しているということです。

さて、重要なのはここからです。誰もがみんな、〈自由〉に生きたいと思っている。でも、〈自由〉に生きるためには、必ずなんらかの「力」がいるのです。たとえば、読み書き算ができなかったとしたらどうでしょう?きっと、電車に乗ることも買い物をする 것도困難でしょう。それはとても〈不自由〉なことです。もちろん必要なのは、読み書き算などの基礎的な「力」だけではありません。スポーツ選手になりたいのであれば、そのための「力」がいるでしょう。学者になりたいのなら、膨大な「知識」がいるでしょう。世界で活躍するビジネスマンになりたいのなら、外国語力や世界についての「教養」がいるでしょう。

わたしたちは、〈自由〉に生きるために実にさまざまな「力」を必要としています。だからこそ、私たちはこういうべきなのです。私にとっての勉強する意味って、いったなんだろう?それは最も根本的には、私を〈自由〉にしてくれる「力」を身につけることだ、と。〈自由〉に生きるためには、そのための「力」がいる。その「力」をつけるために、私たちは勉強しているのです。

とはいえもちろん、障害や病気などの理由で、そうした「力」を十分身につけることが難しい子どももいます。でも、そうした子どもたちにも必ずできるかぎりの「力」を育むことが、実は学校というものの使命なのです。そして、そうした人たちの〈自由〉もまた、しっかり認められるような子どもたち一人ひとりを育むことが、学校というものの使命なのです。

(苦野一徳『勉強するのは何のため?』による・一部省略がある)